

滑走路では誰一人として叫んではいなかった。全員がきびきびと動いていた。事故に備える者、突入受け入れの準備をする者、救護の準備をする者、水晶を揺らす者。その全員が697便を追いかけるように、ターミナルビルの方へと走っていく。

もちろん、走る人々の中には、ハンニバルやコングもいる。ヴォルフもスタングもいる。だが、もう既に誰が誰やらわからない状態。

このままではターミナルビルに突っ込む。それはマジヤバい。マードックの一風変わった脳味噌にも、ちゃんとわかっていった。なので、最後の手段をマイクに向かって告げた。

「脚、引っ込めて。」

そう言われて、ストコドッコイは「そんなのアリか？」と思いつつも、ジェット機の脚を引っ込めた。この状態で脚を引っ込められるとは思っていなかったが、何ということもなく機体が下がり、ドゥッスン、ガガガガガという振動がコクピットを揺らした。無論、客席もガコガコ揺れていることだろう。

摩擦係数が増え、697便は次第に速度を落とす。やっとのことで百ノットを切ったので、ストコドッコイは逆噴射を止め、ブレーキをすべて解除し、フラップを上げた。

「はい、オッケー。お疲れさん。エンジン全部切って、スイッチ全部オフにして、おしまい。」

はふう、とマードックは息をついた。それは、コクピットのストコドッコイも同じだった。

697便、無事とは言えないけれど、とりあえずはロサンゼルス国際空港に到着。ターミナルビルの二インチ手前に。

だがしかし、これですべてが終わったわけではない。マードックの言う通りにスイッチ類をオフにし、ドアのロックを解除したストコドッコイは、コクピットを走り出て、空いていた客席に着き、シートベルトを締めた。それと入れ代わりに、キンケイドがよたよたとコクピットに向かっていく。

ストコドッコイが寝た振りをすべく目を閉じた瞬間、ドアを開けて空港警備隊員が突入してきた。

銃を構えた重装備の男たちは、客席を見回した。乗客乗員、全員席に着いたまま、全員眠っている。

コクピットの方から、(わざとらしく)額の汗を拭きつつキンケイドが姿を現した。

「何とか、やり遂げました！」

(作ったような)笑顔で、Vサインを掲げるキンケイド。数人の空港警備隊員が、グローブをはめた手でポフポフと拍手を贈る。残りの空港警備隊員は、拘束されているハイジャック犯の数を確認。

その頃、一〇一号室のキッチンには、リンゴ、オレンジ、レモンの皮を剥いて刻むクツワダ氏と、電卓片手にレシピに書かれた分量を十六倍しているミラー君の姿があった。

二人の後ろには、パイ皿代わりのフライパンが。先刻クツワダ氏の手によって取っ手を外されたフライパンは、パイ皿と言って言えなくもない姿になっていた。そして、オープンには妙な臭いを立ち昇らせながらも、予熱されているのであった。

緊急着陸した飛行機の鼻面の下で、フェイスマンは身を起こした。地面に倒れ臥したり、カウンターの後ろに逃げ込んだりしていたマスコミと野次馬も同様に、恐る恐る顔を上げて状況を確認している。

機体には、空港警備隊員やら警備員やら何やらが群がっており、ハイジャック犯と思われる連中が連行されており、救急車も引っ切りなしに行き来している。慌てて起き上がり、現場に駆け出すマスコミの皆様。そりゃそうだ、ハイジャック犯の逮捕なんて、どう考えても今夜のトップニュース。

『この騒ぎに乗じて、逃げようっと。』

フェイスマンは中腰でそっと出口へと向かうのであった。

が、しかーし！

「ストロップ！」

ロビーに響き渡る淑女の美声。諸行無常の響きあり。

「突っ込まなかったじゃない。驚いて損したわ。」  
仁王立ちのまま飛行機をお迎えしたキムは、そう言っ、パンパンッと手についた泥(じ)を払った。そして、フンツと鼻息を響かせ、フェイスマンたちの方に向き直る。

「さて、マリアンの日那も帰ってきたみたいだし、パティの支度を手伝うのよ。」

あまりの迫力に、思わず「うん」と頷いたフェイスマン。さっきからキムに手首を握られたままのカメラマンたちも、釣られて頷く。

「上等。これでカメラマンも確保できたし、あとはジェイソンの帰りを待つばかりね！」

キムの目は、いろんな意味で遠くを見つめていた。

ジェイソンの乗った飛行機は、NYを発った後、何の障害もなくLAに向かい、そして今、ロサンゼルス国際空港の上空でぐるぐると旋回を続けていた。697便もぐるぐるしてたけど、それとはわけが違う。着陸できないのだ。ロサンゼルス国際空港、現在大わらわなので。697便着陸のために滑走路を余分に空けておいたし、そのために、他の離着陸をしたい飛行機は、当初の予定とは別の滑走路で離着陸させられているし。そして気がついた時、ジェイソンの乗った機が着陸できる場所はなくなっていた。

管制室で指揮を執っていた、謎の天才管制官(マードック)は姿を消してしまっ、その秘書(ハナコ)も姿を消してしまっ、その側近(フェイスマン)もないし。そんなわけで、ロサンゼルス国際空港で今一番混乱しているのは、管制室なのであった。

ジェイソンの乗る機は、いつになったら着陸できるのだろうか？ 燃料がなくなるまでに着陸させてもらえるのだろうか？

ロビーでは、英雄ブライアン・キンケイド氏がマスコミのインタビューに答えていた。そこへ、広報担当官が一人の女性を連れてきた。誰あろう、ブライアンの妻、マリアンだ。

ターミナルビル内で迷子になっていたマリアンは、何

とか広報担当官と再会したものの、歩き回りすぎてヘトヘトになっており、ビル内のカフェで休息がてらコーヒーをご馳走になっていたのである。もちろん、ケーキも食べたさ。

その間に、広報担当官から事情（ブライアン・キンケイド氏が一人でハイジャック犯をやっつけて、飛行機を操縦している、ということ）を聞きはしたが、マリアンにはどうしてもそのことが信じられなかった。信じられはしなかったが、多分、この事件はニュースとなり、全国区のテレビで放送される。そして、間違いだとは思うけど、自分は、ハイジャックから乗客を救った英雄の妻としてテレビに映る。それは、『どうして？』をさらに広めるのに役立ち、WTPPの宣伝もできる。マリアン、やはり『どうして？』愛好家なのである。

そんな思惑を胸に、マリアンはビル内の売店で化粧品を購入し、念入りな化粧をしたのだった。

話を今に戻すと。  
マリアンは、マスコミに囲まれている英雄の顔を見た。彼は、人違いでなく、間違いなく、自分の夫だった。とても英雄なんて柄ではない、気の弱そうな表情、情けない目許、くるくるの薄茶の巻き毛、優しそうな緑の瞳。急に、胸が熱くなった。

「ブライアン！」  
広報担当官を押し退け、マスコミをも押し退け、夫に駆け寄った。

「マリアン！」  
妻の姿を見て、ブライアンの顔が輝いた。  
が、次の瞬間。

マリアンはマスコミからマイクを取り上げ、大きく振り被ると、ブライアンに容赦ない一撃を加えた。ひるむブライアン。そこへ、マイク（ほぼ棒）による雨あられのごとき打撃を加えるマリアン。

「やめてくれよ、マリアン！ 僕、英雄なんだから！」  
「わかっているわよ、この馬鹿！」

そんな二人の様子を黙ったままカメラに収めるマスコミ一同（キムに連れていかれたカメラマンを除く）。

「馬鹿！ 馬鹿！」  
しゃがみ込んで、腕で頭をガードするブライアンに、

マリアンは何発もマイクを振り下ろした。

「そんな危ないことしないでよ！ あなた、そんなことできる人じゃないんだから！ もしあなたに何かあったら、私とオリバーはどうすんのよ……！」

最後の方は、声が震えていた。

マリアンは、すつと手を下ろした。項垂れた彼女の頬を、涙が伝う。

「……マ、マリアン……？」  
「無事で……よかった……！」

マイクを捨て、WTPPのことも忘れ、ブライアンの胸に飛び込むマリアン。

「ごめん、心配させちゃったね。」

感動的な二人の姿をカメラに収め、安堵の息をつくカメラマンたちであった。「いい絵が撮れてよかった」と。

697便の中では。

ハイジャック犯の数を確認し終えた空港警備隊員は、乗客の安全を第一とし、ハイジャック犯以外の乗客（みんなまだ眠ってる）を機内から運び出していた。

ヴォルフは、眠った振りをしているスットコドッコイを軽々と横抱きにしてタラップを下りていった。その後ろにはスタングが続いているのだが、彼が肩に担いでいるのは、何とガウデンシオ。

そう、キンケイド氏が管制室に報告した人数に、ガウデンシオは含まれていなかったのだった。縛られてもいなかったし。いや、着陸前には確かに縛られていたのだが、スットコドッコイによって。しかし、着陸時の衝撃で、ガウデンシオの両手を縛っていたベルトがワゴンに引っかかって切れ、ガウデンシオとワゴンとキンケイド氏が機内をゴロンゴロンと転がっている間に、ベルトの断片はどこかに行ってしまったのだ。

薄目を開けて、それを確認したスットコドッコイは、ヤバイ、と思った。そして、自分のことを抱き上げている人物がヴォルフであることを確認し（バイザーつきヘルメットの下から見える顎がヴォルフっぽかった）、小声で言った。

「ヴォルフ、大変だ。スタングが担いでる男、ハイジャック犯だ。」

「マジっすか？」

ヴォルフも小声で返す。

と、その時。  
「ここはどこだ？」

そう叫んだのは、お目覚めのコング、ではなくて、ガウデンシオ。葉で眠っていたわけではなく、スットコドッコイの一撃で気絶していただけなもので、スタングに担がれた振動で意識を取り戻してしまったのである。

「何だ、てめえは？」

担がれている姿勢のまま、スタングの腹に蹴りを入れる。スタングも空港警備隊員のプロテクターをつけてはいるが、巨体を肩に担いでいる姿勢の上に、猛烈な蹴りを入れられ、バランスを崩した。危ないことに、ここはタラップの上だ。何とか二段下で踏み留まったスタングだったが、その不安定な姿勢に、さらに数段下に着地したガウデンシオは岩石パンチを繰り出した。

「ぐわっ！」

長身が災いし、タラップの手摺を越えて下に落ちるスタング。ドスン、という地響きがタラップを揺らす。

ヴォルフは後ろを振り返りながらも、何とか親分を守ろうと、タラップを飛び下りた。タラップ下に待機していた担架にスットコドッコイをそっと乗せると、ガウデンシオに向かってタラップを駆け上がった。

だが。

「ぐわっ！」

「ぐえっ！」

次の瞬間、腕つぶしに自信皆無のヴォルフは、ガウデンシオの一撃により、タラップ脇に倒れていたスタングの上に落ちた。

タラップに仁王立ちになり、ガウデンシオはなぜか大声で笑った。

「がっはっはっは！ この俺に挑戦しようって奴は、もういねえのか！」

……何か、趣旨が違う気がする……。

びびる空港警備隊員たち。突如暴れ始めたこの巨漢、銃で撃つていいものかどうか。彼の背後には、まだ乗客がいるし、機体もある。燃料はもうないはずだから、爆発炎上ということにはならないと思われるが……。

麻酔弾もゴム弾も用意していなかった、不手際な空港警備隊。ハイジャック犯は眠らされている、と信じ込み、特に装備を指示しなかった隊長（ハンニバル）の落ち度である。

そんな中、地上で待機していた一人の空港警備隊員が、ずいといと歩を進めた。右手を高々と掲げて。無論、コングである。

「面白え、この俺とやろうってのかい。」

しかし、正々堂々とした勝負を好むコング。いきなりプロテクターを外して、かなぐり捨てた。バイザーつきのヘルメットも脱ぎ、ポイと捨てる。

「誰だ、ありゃあ？」

事態を見守る空港警備隊員（本物）たちの間に、そんな言葉が流れた。

コングは身軽な格好になると、両手を握り締め、グロープを打ち合わせた。

「ほう、ボクサー上がりか何かかい。」

余裕綽々といった様子で、ガウデンシオがニヤリと笑った。

タラップの真下に立ち、ガウデンシオと向き合うコング。目を閉じて精神統一。

カン！

とコングが鳴ったような気がした。その場にいる全員がそう感じた。

その瞬間、コングが低い姿勢のままタラップを駆け登った。そして、伸び上がるようにして、ガウデンシオの顎を目掛けてアッパーを打ち出す。だが、その拳をガウデンシオは上体をすっと後ろに倒すだけの動きで避け、コングのこめかみにフックをお見舞いした。いや、フックをお見舞いしようとしたのだが、ガウデンシオの拳は、すぐにしゃがみ込んだコングのモヒカンをかすつただけだった。体勢を崩したガウデンシオだったが、そのまま意図的にコングの上に倒れ込んだ。そう、これは真つ当なボクシングの試合ではないのだから、何でもアリなのだ。

「何のつもりだ、てめえ！」

ガウデンシオの巨体は、コングを十二分に押し潰せそうに見えた。機内でケーキを鱈腹食べたので、その重さ

も加わっている。その上、コングが踏ん張ろうにも、足場が悪い。何てだったって、足元が階段なのだ。

「ぐははは、このまま俺の下敷になりながら、下まで落ちてしまえ！俺も痛えかもしれないけど、お前の方がずっと痛えだろうなあ。」

「この……っ！」

コングは片足を数段下に下ろしてスタンスを広く取り、足場に問題がないとわかると、ガウデンシオの体に両手をかけ、全身の筋肉に力を入れた。

「ぬおおおおおっ！」

ばいーん！

「何だとオーっ！」

ガウデンシオの体が宙に舞った。空中で彼はしばらくジタバタもがいていたが、まさか飛べるわけもなく、頭から落下していった。スタングとヴォルフがいるのとは反対側に。

一際大きな地響きがし、タラップの下からは歓声が湧いた。

「頭から落ちたア、運の悪い野郎だぜ。」

コングはタラップの半ばに立ち、下を見て、フンツと鼻息を吐いた。

「皆様、ロサンゼルス国際空港は、ただ今ハイジャックの後始末のため、封鎖されております。着陸準備が整うまで、もうしばらくお待ちください。」

「ハイジャックの後始末って、何だろうなあ？」

間の抜けた機内アナウンスに、すっかり退屈したジェイソンはそう思った。

「そうですね、不思議な言い回しですよね。」

ジェイソンの隣のご婦人が、そう相槌を打った。思っただけのはずだったのに、口に出していたらしい。ふああ、と大きなあくびをして、ジェイソンはビジネスクラスの大きな座席に身を沈めた。

「ま、警察に任せてりや大丈夫でしょ。何だか、平和そうな名前のハイジャック犯だったし。マザー・グース友の会、だっけ？」

半分以上椅子からズリ落ちただらしない体勢のまま、ジェイソンは女性に向き直った。こんな時にお喋り

の相手がいるのはいい。

「そうそう、そんな名前でしたわね。何でしょう、絵本の愛好会か何かかしら？」

「だろうね。」

「そんな平和な団体が、どうしてまたハイジャックなんかしたんでしょう？」

「さあね。何か気に食わないことでもあったんじゃないかな。犬がどっか行っちゃまったとか、塀から卵が落ちて割れたとか。ふあああ。」

ジェイソンの二度目のあくびは伝染し、前後左右の数名が三々五々あくびと伸びをし始めた。隣の上品な女性も、ふああ、と、口に手を当てて小さくあくび。機内の二酸化炭素濃度は上がり、それがまた気だるい空気に拍車をかける。

ハイジャック事件が概ね解決を見たことは、機長からのアナウンスで知っている。機内は退屈ですっかり弛緩したジェイソンのような人種と、着陸後に予定があり、待ちかねて不機嫌になっている人種とに、ぱっくり分かれていた。

「後始末って、何をしてるんだ、一体。」

前の席のビジネスマンが苛ついた口調で言った。

「まあ、焦ってもどうにもならないんだし。」

ジェイソンがのんびりと答える。

「大事な会合があるんだ。何か情報はないのか？」

「そう言えば、ラジオで何かやってるかもしれないわ。」  
ビジネスマンの怒りを宥めるように、ジェイソンの隣の女性が、備えつけのヘッドホンを取り上げた。ビジネスマンとジェイソンもそれに倣い、座席の横についているヘッドホンを装着し、地元のラジオ局にチャンネルを合わせる。

「……が催されます。」

地元のアナウンサーらしき女性の声が聞こえてくる。  
「繰り返します。ベストセラーとなったジェイソン・ヒックス作『どうして？』の主人公テンピー氏が発見されました。明日……ホテルで歓迎会が開催されます。」

「何だっけ？」

ジェイソンは叫んだ。

「TPが見つかっただっけ？あのTPが？こうし

ちやいられないぞ。おい、着陸だっ！」

グラフィック・デザイナーに「着陸だ」と言われて着陸できる仕組みの飛行機はないし、管制塔と言え、相変わらずの混乱っぷりで、この飛行機の存在すら忘れてるみたいだし。で、当然ジェイソンの叫びは無視され、ぐるぐるとLA上空を旋回し続ける飛行機でなのあった。

その頃、一仕事終えたAチームの面々（マイナス・ウェイスマン）は、再びマンションに向かっていた。何でも、クツワダさんとミラー氏が作った料理が大量にあるので、それをAチームのバンで会場に運んでほしいとのこと。ハイジャックをすっ飛ばし、ガウデンシオもぶっ飛ばした後だつてのに、貧乏暇なしとはこのことである。マンションに帰り着いた面々を満面の笑みで迎えたのは、ハイデン夫妻。何だか嫌な予感。

「おお、お待ちしてましたぞ、バラカスさん！」  
いきなりの名指しである。しかも老夫妻、満面の笑みで、拍手。

「おう、俺に何かまだ用事か？」  
怪訝そうな顔でコングが言った。

「ええ、用事ももちろんですけど、見えましたよ、テレビ！」

「テレビだと？」

「テレビとな？」

ハンニバルとコングが同時に叫んだ。

「生中継ですよ！ ほら、タラップのところでハイジャック犯を倒したあの後ろ姿！ あれ、バラカスさんでしょう？」

「……まずいな。」

ハンニバルが唸った。確かにまずい。テレビの生中継が入っていたとは。

「後ろ姿だけだったのが残念だが、いや、引きで見ても惚れ惚れする戦いっぷりでしたな。」

ハイデン氏が嬉しそうに言った。

「ええ、本当にステキでしたわ。」

ハイデン夫人も目を輝かせる。

「あの勢いでお願いしますわ！」

「あの勢いで、何をだ？」

「嫌ですね、忘れちゃったの？ ベランダよ、ベランダ！ うちのベランダ！」

ハイデン夫妻は、声を揃えてそう言うと、啞然とするコングとハンニバルに、笑顔でツルハシを差し出した。

二人がベランダ退治に引つ張っていかれたのを一人見送ったのはマードックである。管制塔にいたためにテレビの生放送にはチラとも映らなかった彼氏、早々にハイデン夫妻の興味の対象から外れたらしい。

さて、これからどうするか、と思索のマードックの鼻腔をくすぐる甘い香り。

「ふんふん、こりゃミンスミートパイだね。」

ミラー宅のキッチンから流れる甘い匂いに惹かれ、クンクンと鼻を鳴らしながら階段を下りるマードック。さてご相伴に与りますか、とミラー家のドアに手をかけたその時、遠くから何だか知ったような声が。

「親分、待って下さいよう。膝、膝が。」

「俺は肘が。」

ふと気になってマンションの外を見やれば、そこには、ギクシャク動く空港警備隊員を二名引き連れたデコッぱちの男が、ずんずんとマンションに向かって歩いてくるのであった。

金髪碧眼デコッぱちは、ミラー宅の前に立ってこちらを見ているマードックに気つくくと、顔面に笑顔を貼りつけて近づいてきた。

「始めまして、こんばんは。君はこのマンションの人？」

「家賃は払ってねっけど？」

マードックの答えになつていような、いないような微妙な返答を聞き、白いデコに縦皺が寄った。こめかみには、うっすらと血管が浮き出る。

そう言えば、マードックも縦方向にデコッぱちではあるが、そのデコは現在、キャップに隠れて見えない。

「親分。」

転げるようにして、空港警備隊員二名が追いついてきた。

「えーと、お宅たち、何だっけ、ロシアン・マフィアの……ムスターファとウォルケーノ？」

二人の顔を見て、マードックは記憶の端っこから、こいつらの名前を思い出した。いや、思い出せてない。「スタングとウォルフ。うちの部下、ご存知？」  
デコッぱちスットコドッコイがマードックに言った。

「ああ、じゃ、あんたが例の親分さん？」

目を丸くするマードック。「親分」がこんな小柄な人物だとは思ってもみなかった。金の睫毛に紅い唇、ガラス玉のような青い瞳。まるでお人形のような、宇宙人仕様の。

「もしかして、お宅、その声、管制塔の人？」

同様に目を丸くするスットコドッコイ。わけ知りの管制官がこんな所にいるなんて思ってもみなかった。

それも現在、マードックはいつもの私服姿だし。

「そうそう、ホントは管制官じゃなくてパイロットなんだけども、成り行きで何となく、ね。」

「おかげで助かったよ、スバシーボ。」

と、二人、固い握手を交わす。

「で、話は変わるけど、このマンションの人、できれば管理人か代表者みたいな人に会いたいんだ。どこに行けば会えるかな？」

「管理人はわかんねえな。でも、ミラーさんはいるみたいよ。」

すぐ横のドアを指して、マードックは答えた。そして、その指でドアチャイムを押す。

ピンポーン。

『……はい？』

かなり間を置いてから、ミラー氏の声が返ってきた。

「俺。いい匂いしてるんで来てみた。」

『あ、マードックさんですか。どうぞ、鍵、開いています。』

「じゃ、お邪魔しまーす。」

自分の家のように、ドアを開けずかずか入って行くマードック。口々に「お邪魔しまーす」と言って、スットコドッコイと部下二名もその後が続いた。

だがしかし、ずかずか入っていきながらも、リビングに続く短い廊下は通行止めになっていた。フライパン大のパイ（多数）によって。それも、パイは皿でなく、厚手のケント紙の上に乗っている。それを踏まないように、

そろそろと歩を進める四名。

「こっち、キッチンにいます!」

パイだけが並んだ静かなリビング(仕事場)で「あれ?」と思った四名は、ミラー氏に呼ばれて、今度はキッチンに向かった。ようやく辿り着いたキッチンでは、両手に靴下(新品、二枚重ね)をつけたミラー氏が、焼き立てのパイをフライパンからケント紙に移しているところだった。その奥では、クツワ氏が無表情でパイ生地を伸ばしている。それも、酒壺を用いて。ミンスマートパイの材料は買ったものの調理器具は買わなかったこの二人、試行錯誤でここまで何とかしてきたのである。

「美味そい。味見していい?」

既に冷めているパイに手を伸ばしたマードックだったが、その手をミラー氏はベシッと叩いた。靴下をはめた手で。

「ダメです。明日のパーティ用なんですから。」

「何? 明日、パーティなの?」

「ええ、ご存知ありませんでしたか? 世界各国からお客を招いて、このマンシヨンのみんなで、クリスマスパーティーと歓迎会をやるんだそうです。各国のクリスマス料理を持ち寄って。」

ミラー君がマードック他三名に説明する。

「それで花とか作ってたわけね。」

「だいぶ前にコサージュを作らされていたことを思い出し、合点が行った、という表情のマードック。」

「ね、親分、お宅たちもロシアのクリスマス料理作って参加したらどうよ?」

「うん、面白そうだけど、ロシアのクリスマスって一月七日だからさ。」

ストトコドッコイの言葉に、部下二名もうんうんと頷く。そう、ロシア正教はグレゴリオ暦ではなくユリウス暦を使用しているので、クリスマスの日がちがズれるのである。

「じゃあ、クリスマスを祝うんじゃない、ただロシアのクリスマス料理をみんなに紹介するために作って参加するってのは?」

「それならいいか。ロシアのこと、もっとこの国の人た

ちに知ってもらいたいしね。」

機内でウォトカを飲んだ時のキンケイド氏の反応を思い起こすストトコドッコイ。

「それはいいんですが、親分、料理できるんですかい?」

スタングが心配そうに尋ねた。

「料理? できないよ。」

きっぱりと答える親分。

「誰か、ロシアのクリスマス料理を作れる人を探し出して、一つ二つ作ってもらえばいいじゃん。そうだな、アレがいいね、何て言うんだっけ、ピーツのサラダ。」

「ロソリでさあ。」

ヴォルフが答える。ロソリとは、賽の目に切ったピーツ、ジャガイモ、ニンジン、ピクルスを、サワークリームとピーツ汁等で和えたサラダである。

「そうだ、ロソリだ。じゃ、早速よろしく。」

笑顔向けられた部下二名は、またまたミラー家のキッチンを後にした。恐らく、ピロシキ屋のナターシャに頼みに行くのであろう。

「ニシンのマリネも忘れずに!」

そんな部下の後ろ姿に、ストトコドッコイはそうつけ加えた。

ミラー家の玄関を出て、スタングとヴォルフは困っていた。ここからナターシャのピロシキ屋までは、やはり車で行きたい。歩いて行けない距離ではないが、体中痛いし、精神的にも既にぐったりしている。しかし、ヴォルフの車はオリバーとユリア(とマドモアゼル・アントワネットとマサンさん)に貸してしまったし、街でタクシーを拾うのは容易なれど、このマンシヨン近辺でタクシーを捕まえるのは難しい。

一縷の望みを持ってマンシヨンの駐車場に足を運んだ二人の目に飛び込んできたのは、見慣れたヴォルフのバン。

「あった!」

「やった!」

バンに駆け寄る二人。しかし。

「キーがねえよ……。」

大事なことに気づいたヴォルフであった。

「おい、あの車、あいつらんだよな?」

気落ちするヴォルフの横で、スタングが言う。彼の指差す先には、Aチームの(コングの)バンが。

「俺たちの服、あんな中にあるんだよな?」

「元々の俺たちの服は、こん中だ。」

すっかり忘れていたが、メロンソーダ浸しになり洗濯を強いられた彼らの黒服は、生乾きのまま、ヴォルフの車の中にあるのだ。今はもう完全に乾いていると思うが、「ともかく、服と車だ。いつまでもこんな服、着てらんねえぜ。」

空港警備隊の制服は、何だかんだとついでるので重く、それでなくても体力の残りわずかな二人には、文字通り重荷になっていた。

「集会場、行ってみるか。」

「そうだな、誰かいるかもしんねえし。」

スタングの意見に、ヴォルフも賛成した。

それから数分後、集会場、即ちジェイソン宅前で、部下二名は途方に暮れた。ドアチャイムを押ししても押ししても返事がない。

「なあ、スタング。」

「何だ?」

「オリバーんち、何号室だったっけ?」

「ああ、確か、あの婆さんが教えてくれたよな。」

「一階……だったっけか?」

「どうだったっけかなあ……。」

片っ端から訪ねて回ればいいということとはわかってるものの、どうも体が動かないスタング&ヴォルフであった。

ハリウッド・ルーズベルト・ホテルのWTPP会場に連れてこられたフェイスマンとカメラメン、および連れてきたキムはと言えは。

「あら、準備、もうほとんど全部できてるじゃない。」

軽い足取りであちらこちらの出来を見て回り、ほくほく顔のキム。ついでに、パネトローネを引っ繰り返して、裏からほじって食べる。

そんな嬉しげなキムとは対照的に、口をポカンと開けたまんまのフェイスマン。だって会場内のここに自

分の写真が飾ってあるのですもの。それも、彼としてはあまり嬉しくない写真が。

カメラマンたちは、しばらく戸惑っていたものの、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルのパーティ会場に写真をごまんと飾られているこの空港職員には、何か秘密があるのでは、と勘繰り、フェイスマンの写真と会場内の写真とを撮りまくっていた。もしかしたら、記事になるかもしれない、と。

「せっかくなら、あとは明日ね。他のみんなも帰っちゃったみたいだから、私たちも帰るわよ。」

パネトローネをバフンと戻して、キムが宣言した。

「あの、僕たちは……?」

一人のカメラマンが、恐る恐る尋ねた。

「明日また来て。顔パスで入れるようにしとくわ。」

偉そうにキムが答える。顔パスも何も、キム、彼らの顔を覚えてないと思われまます。ま、マスコミ関係者全員フリーパスってことで。

腰を低くして帰っていくカメラメンを見送ると、未だ口開けっ放しのフェイスマンを引き摺って、キムはマンションに帰っていったのであった。

空港ロビーでのヒーローインタビュー(?)も終わり、やっと家に帰れると思ったキンケイド夫妻だったが、今度は遅れてやって来た警察に身柄を拘束された。とは言え、キンケイド氏がハイジャック犯人でないことは明らかなので(なぜならば、氏のワイシャツに地球のバックプリントは入っていないため)任意出頭であるのだが、調子に乗ったキンケイド氏は、この後、警察で事情聴取を受けることにはうっかり承諾してしまったのだ。流された、と言うか。そして、キンケイド氏は、早く家に帰りたいマリアンに警棒でぶられたのだった。

結局、マリアンは先にマンションに帰ってしまい、一人、警察に連れていかれたキンケイド氏は、取調室ではなく応接室で持てなされながら、数十分間、事情を説明した。もちろん、ストコドッコイのことには一切触れずに。彼、案外頭がいいようで、管制塔との交信と食い違うようなことは全く言わなかった上、ウオトカを浴びるように飲んだことも正直に話した。そのおかげで、録

音されていた交信内容を既にチェックしていた警察側も、彼の妙な発言を、酔っ払っていたため、と解釈してくれた。

本来ならば、酒気を帯びて旅客機を操縦したかどにより、キンケイド氏は罰せられるはずである。それ以前に、彼には旅客機操縦の資格もない。しかし、いずれも、非常事態だったから、ということ許された。ハイジャック事件を一人の犠牲者も出さずに解決した英雄を、そんな些細なこと罰してしまつたら、国民からの苦情が殺到すること間違いなしだ。下手をすると、諸外国から総スカンを食らってしまうかもしれない。

というわけで、すぐにキンケイド氏はバトカーでマンション前まで送ってもらえた。「タクシードが浮いてラッキーです」なんて言っている、人当たりのよい庶民的な英雄に、警察の誰もが始終友好的なのであった。

ハリウッド・ルーズベルト・ホテルの周りは、夜になっても人通りが絶えない。観光客も多いのだが、多くは近くのレストランやクラブでデートを楽しむ地元若者たちである。

そんな繁華街を、一体の日本人形が歩いてくる。いや、人形ではない。キモノを着た生身の人間だ。真っ赤な地に白の御所車柄の大振袖の両手の先からは、金属の棒が二本、閉じたり開いたりしながら揺れている。そして、彼女の背中には、でかい風呂敷包が背負われており、何だか不穏な空気を醸し出している。

「うっ!」  
擦れ違つた青年が、膝からくず折れた。

「どうしたのっ、大丈夫?」

ガールフレンドが彼に駆け寄る。

「は、鼻が、鼻が曲がりそうだった。」

彼はそう言うと、激しく咳込んだ。

ハナコ・ヤマダは、そんな青年に冷やかな視線を送りつつ先を急いだ。ダウジング・ロッドが示す先は、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルだ。空港のハイジャック騒動の際には、思いがけず役に立ってしまった彼女、元ドワーニ君の恋人であり、現在はなぜかマードックに片思い中である。

ハイジャック機が着陸した後、ハナコはロビーから管制室に戻ったのだが、時既に遅く、マードックは管制室からトンズラした後だった。そこで、水晶に念じてみたところ、マードックと再び会うためには、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルで開催されるWTPPに参加すればよい、とのお告げを受けた。また、水晶は、WTPPに持つていくと幸運をもたらす品々についても、教えてくれた。

このところ、水晶がよく働いてくれて、ハナコとしては大満足である。ドワーニ君に対しては、何らの効果も現さなかったのに。それは、きつとバチカンが妨害していたのだ、とハナコは信じていた。

そんなわけで、水晶のお告げ通り、彼女はハリウッド・ルーズベルト・ホテルを目指していた。ダウジング・ロッドの力も借りて。

「ここだわ。」

ホテルの正面玄関に立ち、彼女は満足げに微笑んだ。彼女を迎え入れようとドアを開けたドアマンは、そのままフラフラと壁に凭れかかった。

「どうしたの?」

ハナコ・ヤマダは、そんなドアマンに笑顔でそう問うた。

「な、何ですか、その臭いは。ゲホッ、ゲフッ。」

「決まってるでしょう、明日のWTPP用のご馳走で、会場はどちらかしら。」

鼻と口を手袋で押さえたまま、無言で方向を指し示すドアマンに、「ありがとう」と笑顔で微笑みかけ、ハナコはWTPP会場へと向かった。

「ここね。」

観音開きのドアの横には、でかい模造紙(安つ)が貼られており、そこには、レインボウのマークで、こう書かれていた。

『ウェルカム・テンピー・パーティ(クリスマスパーティーも兼ねます) ジェイソンとテンピー、三十年振りの再会! 二十五日午前十時より』

ハナコは、ゆっくりと扉を開くと、会場に一歩足を踏み入れた。そして中央のテーブルへ歩み寄り、おもむろに背中の風呂敷を解く。そして中身をテーブルに並べ始

めた。

「やっぱりパーティにはこれよね。」

と言つて、開かれた魚類をべしつとセンターに。因みにこれ、八丈島のトビウオのクサヤ。

「これは爆発しやすいから、ちよつとガス抜きしとかなきゃ。」

次に取り出した缶詰に、手近にあったケーキナイフの先で穴を開ける。プシュー、とガスが抜けるこの缶詰の中身は、シュールストレミング。

「それに、これと、これ。」

と言つて取り出されたビニール袋の中身は、ええと、キビヤックとホンオ・フェです。

「よし、これで完璧。きつとあの方(マードック)も喜んでくれるわ。」

ハナコ・ヤマダはそう言うと、満足げに会場を後にした。ものすごい臭いだけを残して。

その頃、WTPPの主役の片割れジェイソンはと言えば、なぜかサクラメントでタクシーを待つていた。結局、ジェイソンが乗っていた飛行機は、燃料が残り少なくなつたため、滑走路の再開を待たずに近場の(とは言え、飛行機で一時間半かかる)サクラメント国際空港に着陸したのだ。今からLAに行く別便はもうないし、今夜はどこかに宿を取つて、明日の朝イチでLAに戻るしかあるまい。

「畜生、せつかく予定通りに帰ってきたのになあ。これじゃWTPPに間に合わないかもしれないよ。今からレンタカーで帰るもの何だしなあ。」

と、グチりつつタクシー乗り場で列に並ぶジェイソンの目に飛び込んできたのは、『高速バス・ロサンゼルス行き』の看板。

「バスか。バスなら安いし、確か十時間かからずに帰れるよな。バスにしよう、バスに。」

イソイソと長距離バス乗り場に向かうジェイソンであった。

ハイデン宅のベランダに新たにコンクリートを流し込んだコングは、リビングでくつろいでいるハイデン夫

妻とハンニバルとに、明日の朝まで絶対にベランダには足を踏み入れないように言い置き、ジェイソン宅へと戻つた。いや、戻ろうとして、ドアの前にへたばつている二名を目にし、眉間に皺を寄せた。

「てめェら、そんなところで何してんだ？」

ゆっくりと面を上げてコングを見上げるスタングとヴォルフ。

「……もう動けねえ……。」

「右に同じ……。」

「つたく、牛乳飲まねえからだ。」

スタングとヴォルフを足先で退かすと、コングはジェイソン宅内へずんずん入つていった。因みに、ジェイソン宅、最近、施錠されてません。

そしてコングは、キッチンに直行して冷蔵庫を開けると、ガロン壺から直接、牛乳を呷つた。

「くはあ、美味え。」

納得行くまで牛乳を貪り飲むと、コングは牛乳を冷蔵庫に戻し、ロシアン・マフィア二名のことは無視してバスルームへ向かった。シャワーを浴びて、その後には恐らく、再び牛乳を飲むのであろう。

ドア前に残されていたスタングとヴォルフは、何とかジェイソン宅内に匍匐前進し、現在は廊下でへばつていた。

「ヴォルフ、お前のバンは諦めて、車借りるってどうだ？」

「ああ、あのモヒカンの奴の車な。一丁、借りるとするか。」

スタングとヴォルフは、壁を伝つて立ち上がった。バスルーム前の洗面所(兼・脱衣所)までずるずると歩き、ドアの外から呼びかける。

「あのー、ちよつと車貸してもらえませんかね？」

「ああ？」

スタングの声は、元々通る声ではない上、今は特に力が籠もつていなかった。なので、シャワーの水音に掻き消され、コングの耳にははつきりと届かなかつた。だから、コングはモヒカンをシャクシャク洗いながら、「ああ？」と聞き返したのだ。

しかし、二人には、それが肯定の返事に聞こえた。ち

ようど、脱いだ服のポケットから鍵がぶら下がっているし。

何の疑問もなく、スタングはその鍵を手に取りヴォルフに投げて寄越すと、二人はずるずるとジェイソン宅を後にし、駐車場に向かった。

ミラー宅にて、マードックとストコドッコイは、パイ作りに勤しむミラー&クツワダ両氏(主に勤しんでるのはクツワダ氏)を眺めながら、自己紹介をしたり、趣味について語り合つたり、カメと遊んだり、デコの面積を計算したりと、かなり親睦を深めていた。だが、ミラー氏に「パイ、運び出してもらえませんか？」と頼まれ、輸送手段を得るべく、コングと合流することにした。マードックもストコドッコイも、あれこれ操縦する腕はあれど、操縦対象がなければ何にもならない。

蛇足ながら、実はパイ作りをしたくないミラー氏は(面倒だから)、クツワダ氏をおだてまくって調理をほとんどすべて彼任せにし、かと言って何もしないているのはクツワダ氏に失礼なので、クープに乗つて何度か材料を買ひ足しに行ったのだ。ミラー氏も忙しく立ち働いている、という風情を醸し出すのには成功したが、そのせいでクツワダ氏の作業は終わりが見えず、パイが家中に並ぶこととなってしまった。頑張り、クツワダ氏！明日の朝、チキンとケーキを買わなくては！

というわけで、ジェイソン宅に戻つたマードックと、ついて来たストコドッコイ。誰かに何となくついて行つてしまうのは、ロシアン・マフィアに共通の性質なのかもしれない。

「コングちゃん！」

「おう、風呂だ！」

マードックの呼びかけに、バスルームから返事があつた。マードックとストコドッコイ、バスルーム前に移動。一抹の遠慮もなく、バスルームのドアを開き、乗り込んでいってシャワーカーテンの中に首を突っ込むマードック。

「ミラーさんがパイ連んでほしいって。車出して。」

「ああ、元々はそのために帰つてきたんだしな。三分待つてろ。」

「コングはマードックにシャワーヘッドを向けて、そう答えた。」

清潔な服を着て、またはや牛乳を飲んで、人心地ついたコングと、リビングでボルシチについて語り合っていたマードック（上半身ずぶ濡れ）とストットコドッコイ。さあこれからバイ運びだ、と思った矢先。

「車の鍵がねえ。」

さっきまで穿いていたズボンのポケットをあちこち探って、コングが唸る。

「モンキー、おめエ、鍵どこにやった?」

「何でオイラに聞くわけ? 車の鍵の行方なんて知ってるはずじゃないやん。何時に帰るかも聞いてねえし。」

コングは最後の一文を当たり前のように無視したが、ストットコドッコイは首を傾げた。

「……だよな。もちつとその辺、探してみるか。ハイデンさんとこかもしんねえしな。おめエらは先に車んここに……って、おめエ誰だ? 初めて見る顔だよな?」

ストットコドッコイの存在に今更気づいたコング。

「えーと、まず先に、親分、これ、コングつての。顔はイカツいけど、心は多分優しい奴。で、コング、こちら、ロシアン・マフィアの親分、イワン・ストットコドッコイさん。」

と、マードックが紹介する。

「どうぞよろしく。君、ハイジャック犯のあのデカブツと勝負してた人?」

ストットコドッコイが席を立つて、コングに右手を差し出す。

「ああ、そうだ。よろしくな、親分。」

その手を握るコング。

「君、うちの組織に入らない?」

早速、コングをスカウトしたいストットコドッコイ。

「悪いな、俺アロシアン人じゃねえから、ロシアン・マフィアにや入れねえ。」

「あ、そうか。残念だなあ。じゃあ君はどう、モンキー。」

「オイラもロシアン人じゃねえもん、無理無理。」

「そうだよねえ。……ロシアン人かロシアン系って限定しちゃってるのがまずいのかな。なかなかいい人材がいなく

てさあ。」

「ロシアン・マフィア名乗ってんなら、仕方ねえだろ。」  
口をへの字にするストットコドッコイに、コングがびしっと当然のことを言っていた。

コングのパンの鍵を手に入れたロシアン・マフィアの部下二名は、Tシャツとジーンズに着替え、バンに乗ってナターシャのピロシキ屋に向かった。しかし、当たり前と言えは当たり前だが、いつもの場所に屋台は出ていなかった。もう夜も遅いので、駅前のタコ焼き屋とはターゲット客が違うのだ。

「ナターシャがどこ住んでるか知ってるか?」

路肩に車を停めて、ヴォルフは助手席のスタングに尋ねた。

「知らん。恐らく、この近辺だとは思わがな。」

しばらく二人は無言で波の音を聞いていた。

「……こうしてても埒が開かねえ。街行つて、ロシア料理屋を探そう。」

ハンドルに突っ伏していたヴォルフが、背を伸ばして意見を出した。

「ついでに、どっかで夕飯にしようぜ。お前の奢りだな。」

スタングの腹が、いいタイミングでグゲーと鳴る。

「残念ながら、俺の財布も免許証も、俺の車ん中だ。」

「そんでもって、俺の財布も、お前の車ん中なんだよな。」

一文なしで無免許の二人は、マンションに戻るしかなかった。制限速度以下で。

コングは車の鍵を探しに、ハイデン宅へ行った。マードックとストットコドッコイは、ミラー宅でパイを

持てるだけ持って駐車場に向かおう、ということ。今、ミラー宅の前にいた。と、その時。

「どうもありがとうございます。おやすみなさい。」

道路の方から、耳障りのよい声が聞こえた。それに続いて、車がUターンして去っていく音も。そして姿を現したのは――。

「あれ? 親分さん、何でここに?」

「フライアン・キンケイド、やっとこさ帰還。だが、自分とこのマンションに帰り着いて真っ先に会った人物が、機内でお世話になったロシアン・マフィアの親分。」

「え? 君こそ、何でここに?」

「お宅がフライアン・キンケイドさん?」

中で一番事情がわかっているのがマードックというのも、どうかと。

「ええ、そうです。あなたは?」

「ある時はパイロット、またある時は管制官、加えてまたある時はジェイソンの従兄弟の知り合い、さらにまたある時は精神病患者、人呼んでモンキーことH.M.マードック。どうぞよろしく。」

「ああ! 管制塔の人! その節は大変お世話になりました。ジェイソンのお知り合いの方だったとは、世の中、狭いものですね。」

有無を言わずマードックの右手を掴み、シェイクハンド。

「私の家、ここなんですよ。」

キンケイドが、マードックとストットコドッコイに言う。

「知ってるさ、そんくらい。」

とマードック。知らないわけがないよな。だがしかし。

「何だって!」

ストットコドッコイの目は見開かれ、眉間にはコング並みの皺が寄った。

「私、このマンションの住人なんです。普段は単身赴任でアブダビにいるんですけど。妻のことはお話ししたよ。ああ、やはりあの後、妻に棒でぶたれましたよ。そうだ、親分さん、息子のオリバーにも、ぜひ会って下さい。」

家族を紹介したくて堪らない若いお父さん。

「今日はマリアンもオリバーも忙しくしてたし、ここんと二人とも寝る暇もなかったみたいだから、疲れ果てて、もう寝ちまってんじゃないかな。」

マードックが口を出す。ストットコドッコイはキンケイド氏の妻子には興味がないだろうし。そんな、妻子に会わされて嬉しいもんでもないし。マリアンに棒でぶたれるかもしれないし。それに、マードックにはストットコド

ツコイの目論みがアバウトわかってるし。ハンニバルの推理が正しければ、だが。まあ、先ほどのストコドツコイの反応から、ハンニバルの推理もあながち間違っていないことが判明。

「どうせ明日のパーティにみんな出席するんしょ？その時でいいじゃん。」

「WTPPですね、妻から聞きました。ええ、もちろん私も出席します。親分さんも？」

「あ、うん、出席。」

一人考え事に没頭していたストコドツコイは、上空で返事をした。

「それじゃあ今日はこれで失礼させていただきます。私も疲れました。おやすみなさい。また明日お会いできることを楽しみにしています。」

腰を低くし、二人の方に顔を向けたまま、キンケイド氏は階段の方へ向かっていった。

「それから、今日は本当にどうもありがとうございました。」

そう言って、彼は二人の視野から消えた。

その後、マードックと、考え事を終えたストコドツコイは、一人一つずつミスミートパイを持ち、駐車場に向かった。しかし、駐車場のどこにも、コングのバンは見当たらない。と、そこへ、コングが走ってきた。

「車の鍵、見つかん……俺の車はどこだ！」

「ないねー、コングちゃんのバン。鍵も見つかんかったわけ？」

「車、盗まれたんじゃないかな。鍵差したまんまだったとか。」

パイを持った二人を前に、コングは記憶を反芻した。

「いや、確かに鍵をポケットに入れた。そりゃあ間違いない。で、ここから直接ハイデンさんと行って、ベランダ直して、自分ち（ジェイソン宅）に戻って、牛乳飲んで、シャワー浴びて、牛乳飲んで……そう言や、あいつらがいて、何か言ってたな、シャワー使ってる間に。」

「あいつらって？」

今回、関係者が多いので、見当がつかないマードック。

「あのロシアン・マフィアの奴らだ。」

「スタングとヴォルフか。」

と、ストコドツコイ。またマードックに変な名前をつけられるのも何なので、先んじて言っておく。

「おう、それだ。そいつら、うち（ジェイソン宅）の前にへばってやがって、俺について家の中入って来て、何か言ってたが、いつの間にかいなくなっちゃってたな。」

「そう言えば、いないね。どこ行ったんだろ？」

パイの下を覗き込むマードック。そこには誰もいません。

「ロシア料理作れる人を探しに行ってるはず……なんだけど、あそこにヴォルフのバンがある。」

顎の先でバンを指して、ストコドツコイが答えた。

「ってことは、奴らが俺の車の鍵を盗んで、俺の車に乗ってたのか。」

「多分、そう。」

「今度会ったら、ぶん殴ってやる。」

「どうぞ、ご遠慮なく。」

フツと笑う親分に、コングはニヤリと笑い返した。

それから五分後、何の収穫もなく戻ってきたスタングとヴォルフ、およびコングの車。さらにそれから十五秒後、口々にストコドツコイに言い訳を始めたスタングとヴォルフは、コングの拳によって駐車場の床に沈められ、やつのことでストコドツコイとマードックはパイを車の中に下ろすことができた。

ミラー家では最後のパイも焼き上がり、片づけもそこに、クツワダ氏は自分の家に戻った。ミラー氏は、片づけそこそこのキッチンをもまににして、ベッドルームへ向かった。そして、ミラー家から運び出されたパイは一旦駐車場に並べられ、コングはマンションとハリウッド・ルーズベルト・ホテルとを四往復したものの、WTPPという名称を知らなかったコングは、結局、ホテル職員の手違い（勘違い）により、ホテルの調理場にパイを預けてしまった。多数のミスミートパイの運命や、いかに？

「そこで止める。」

デッカーは、テレビの下にかしずいている部下Cに向

かってそう言うと、椅子から身を乗り出した。目の前のモニターには、今日、ロサンゼルス国際空港で発生したハイジャック事件の中継が映っている。

部下Cは、デッキの前にしゃがんで、上司の命令通りにテープを巻き戻りたり早送ったり。床がフカフカの絨毯じゃなかったらやたららんないくらいのズボンの膝ダメージ。

「ここだっ！」

デッカーは、一時停止したブラウン管に飛びついた。その勢いに、不安定な中腰だった部下Cは、バランスを崩して後ろに引つ繰り返った。

「うわ、びっくりした。大佐、落ち着いて下さいよ。VTRは逃げませんって。これ、最新型のベータマックスだし。」

「これが落ち着いていられるかっ、見ろ、これを！あ、コマ送りだな。」

と、デッカーが再び指示。コマ送りーデジタル全盛の昨今では「コマ」という概念も消えつつあるが、八十年代半ばには、それも画期的な発明だったりする。

「はい。」

部下C、コマ送りのボタンをポチツとな。

画面の中で、ガウデンシオがゆっくりと飛んでいく。そして、その巨体が落ちていくのを見送るように突っ立っている後ろ姿、それは……。

「間違いない、バラカスだ。とうとう見つけたぞ。」

デッカーは鼻息荒くそう言った。いや、あんだ、結構見つけてるんだけどね、捕まえてないだけで。

「C、ここは、どこだ？」

「何すか、その頭悪そうな質問。本部の応接室ですけど。」

「ちーがーう、テレビに映ってる場所はどこかと聞いているんだ。」

「ロサンゼルス国際空港です。」

「探せ。」

「は？ 探すって、バラカスをですか？ これ、もう何時間も前の映像だから、本気で逃げる気なら、相当遠くまで行ってるはずですけど。」

「……構わん。何か痕跡を残しているかもしれん。ロス

から市外に出る道路を全部封鎖して検問をかけるんだ。何してる、早く行けっ。」

「はっ！」

部下Cは、素早く立ち上がると、イソイソと部屋を出ていった。よほどデッカーと二人きりが嫌だったらしい。そんな部下Cの心も知らぬデッカー、一時停止されたVTRに映るコングの後ろ姿に不敵な笑みを浮かべ、お決まりの台詞で決めるのであった。

「Aチームの奴らめ、今度こそ一網打尽にしてくれるわ！」

やつとので起き上がったスタングとヴォルフは、それからたつぷり十五分間、スットコドッコイのお説教を聞き、再び夜の街へ放り出されていた。ロシア料理店を探しに。彼らの空腹のためではない。スットコドッコイが明日、何やら言うパーティ（目的等詳細は不明）に出席することになったのだが、出席するからには最高のロシアのクリスマス料理を振る舞うべきだとの考えに基き、今度もしっかりと業務命令にてロシア料理店を探しに行かされているのだ。

ヴォルフとスタングの乗った七人乗り自転車は、周りの車にクラクションを鳴らされまくりつつ、一番右の車線をのんびり走っていた。何せ彼ら、目立つのだ。だつて乗ってるものが尋常じゃない。ええと、遠目で見ると、バーのツールに腰かけた男が二人、前後に二メートルの間隔で並び、一輪車乗りのように両手でバランスを取りながら細かく足先だけ動かしており、彼らの足首から下の辺りには大小様々な歯車が複雑に絡まり合い、紆余曲折とか愛憎憐憫とかいろいろあった感じで最終的には縦列で組まれた乗用車用タイヤ七つが転がって前に進んでいる。発する音は、ギーコギーコとウィンウインの合体、に、なぜか混じるピヨピヨピヨ。スピードは、スクーター並み、もしくはそれ以上。

二人とて、好んでこんな妙なものに乗っているわけではない。もう徒歩で出るだけの体力は残っていない。自動車の鍵も運転免許証も財布もなく、倉庫の片隅にブルーシートをかけてそっとしまつてあったこの自転車を見つけた時、「これは、やめた方がいい」という常識

的な判断ができるほどの糖分は、彼らの脳味噌に残っていないかった。

というわけで、スタングとヴォルフ、Aチーム作のヤンソンのクリスマス・プレゼント用の自転車に乗り、夜の街を彷徨うのであった。

「おい、さつきから後ろついて来てんの、覆面パトじゃねえか？」

後ろに乗っているスタングが、キコキコとペダルを漕ぎながら言った。

「何だど？」

前の席から振り返り、ヴォルフは真後ろにびつたりくっついていて黒のセタンを確認した。その間も、足首はキコキコと動いている。

「……わからないな。普通の奴に思えるけどな。」

「それにしちやおかしいぜ、だつて、俺たち、さつきから迷ってるだろ？」

「ああ、迷ってる。」

「ボルシチ探して。」

「ストロガノフを探してな。」

「で、この辺の道、何周もしてるだろ。」

「そうだっけか？」

「そうなんだ。なのに、後ろの車も一緒に何周もしてる気がするんだ。」

「後ろの車も迷ってるんじゃないか？」

「自転車の後ろに張りついてるか？ 抜かしてくだろ、普通。」

「そう言われてみりゃそうだな。自転車の一台くらい、さつきと抜けばいいんだもんな。」

「やっぱり覆面じゃないか？」

「かもしれん。撒くか。」

「おう。」

そう言つて二人は、一気にペダルを踏み込んだ。

「退屈だなあ。」

深夜バスが一番後ろの席に陣取つたジェイソンは、出発十五分後に既にそう呟いていた。

車内は空いている。五十人くらいは乗れる大型バスなのだが、乗客はたった三人。斜め前に座っている、L A

に遊びに行くらしい若者二人は、有名なサーフィショップのバッグを通路に置いている。波がどうか、オフショアがどうかと話をしている。サーフィン旅行なのだろう。完全なる文科系のジェイソン、サーフィンの話には入っていきそうにない。

深夜バスというのは根本的に寂しいものだ。例えその行く先が楽しいバカンスや心休まる帰省であったとしても、数時間十数時間のバス乗車期間は、何だかもう暇だし腰は痛いし、早々に電気が消えるから本も読めないし、もちろん誰とも話せないしで、自分の内側に沈み込んでいくのを止める術のない陰鬱な時間である。ジェイソンのような寂しがり屋（よく言えば）、あるいはお祭好き（そのまんま）のパーティ・ピールにとっては、ただ座っているだけの夜なんて、懲役刑にも似て。

ジェイソンは、話に加わる切っかけがないかと、若者たちの様子を窺っていた。が、話はさらにサップアウトだのバンク何とかだの、マニューバだのミドル何とかだのと、全くもってジェイソンの知識外の単語のオンパレード。さすがの彼氏も諦めて、鞆からアイマスクを取り出した。ジェイソンが眠りの淵に落ちていったその頃、静かに次のバス停に滑り込む深夜バス。

プシュー、と折り畳みドアが開いたその瞬間。

「あら、空いてるじゃない。」

「席取つて、席！」

「ピール買ってきた？」

「もちろんよ！」

けたたましい喋り声と共に乗り込んできたのは、婦人方十数名。荒々しい靴音と共に、席を確保し、荷物を上のラゲッジに放り込む。その物音に浅い眠りから引き摺り出されたジェイソンは、怪訝そうにアイマスクを外して身を起こした。

「さつ、まず乾杯しましょ！ ウェルカム・テンピー・パーティの前夜祭よ！」

「そうね、明日、やつとジェイソンとテンピーが再会するんですけどね。」

「テンピーってどんな人なのかしら。ハンサムだといひけど。」

「当然じゃない、だつてテンピーよ？ ゲッドルッキン

グに決まってるじゃない。」

「ご婦人方は、手から手へと缶ビールを投げ渡ししながら、口々にそんなことを叫んでいる。」

「何だ……?」

「起き上がったジェイソンに、一人のご婦人が気づいた。『あらお兄さん、あなたもどうぞ。』」

「投げ渡される缶ビール。ジェイソンは、わけのわからぬままそれを受け取ると、反射神経でブルトップを引いた。」

「えー、では皆さん、明日に控えたジェイソン・ヒックス氏とテンピーの再会を祝って、かんばーい!」

「かんばーい!」

「かんばーい!」

「か、かんばーい。」

「釣られて乾杯するジェイソン。」

「えーと、もしかして、明日のWTPPに参加される方々ですか?」

「そう! WTPP! もしかして、あなたも?」

「ええ、僕もです。」

「奇遇だな!」

「斜め前から声が飛んできた。」

「俺たちもWTPPに行くところだったんだ。もちろん、サーフィンもするけどな!」

「ああ、ビッグ・ウェンズデーにも匹敵する歴史的瞬間をこの目で見なきゃね!」

「全く別の人種だと思っていた若者たちも、WTPP参加者だったとは。」

「じゃあ、改めて、乾杯!」

「ご婦人の一人が叫んだ。」

「乾杯!」

「再び缶ビールを掲げ合う乗客たち。」

「こんなにも『どうして?』が愛されているとは。そして、本当に僕は明日、テンピーに会えるんだ……。」

「ジェイソンは、わけのわからない感動に包まれつつ、ビールを飲み続けた。」

「その後も、バス停に停まるたびに乗客は増え続けた。そして、その全員がWTPPの参加者たち。老若男女、」

「幼児から老人まで様々な『どうして?』ファンで満員の深夜バスは、一路ハリウッド・ルーズベルト・ホテルを目指すのであった。」

「キム運転の車でマンションに帰ってきたフェイスマン。キムとは階段のところで別れ、そのまま直進して自分の家に戻るキムの後ろ姿を見送ることもなく、フェイスマンは階段に足をかけた。と、その時。」

「……ールプ、メー、エー……。」

「微かに囁くような声が聞こえ、フェイスマンは辺りを見回した。誰もいない。しかし、耳を澄ますと、波の音に混じって、やはりその声が聞こえる。背筋がゾクッとした。まさか、先日見かけたあの化物(未確認生物)か……?」

「勇気を振り絞って、あちらこちらへ少しずつ移動してみる。どうやら、階段を登りかけた辺りが一番よく聞こえる。そこで、じっと耳を澄ます。」

「エールプ、メー。誰か。助けて。」

「エヴェレット氏の声だった。そう言えば、階段脇はエヴェレット宅。壁の向こうでエヴェレット氏が助けを求めているのだ。それにしても、助けを求めているにしては、か細い声だ。もしか、死にかけて?」

「大丈夫ですか、エヴェレットさん! 今、行きますから、死なないでね!」

「フェイスマンはエヴェレット宅に駆け込んだ。ドアに鍵はかかっている(アントワネットさんが出ていった時のままだから)。真っ暗な廊下を手探りで進み、階段の横辺りの部屋に入った。」

「ツンと鼻を刺すアンモニアの臭いの中、エヴェレット氏はベッドの上にうつ伏せに倒れていた。暗がりの中で月明かりを受けて白く浮かび上がるエヴェレット氏の背中。」

「エヴェレットさん!」

「誰だか知らんが、助けてくれ……。」

「駆け寄ったフェイスマンに、エヴェレット氏はうつ伏せのまま顔も動かさずに、しかしはつきりとした口調で言った。」

「ジェイソンの従兄弟のテンブルトン・ベックです。写」

「真のモデルになった……。」

「ああ、君か。済まんが、救急車を呼んでくれ。キムには内緒で。背中から腰が痛くて動けないんだ。」

「わかりました!」

「転がるようにしてリビングに出ると、フェイスマンはリビングの電気を点け、電話を見つけた。そして、リビングを見て思い出した。エヴェレット氏がなぜ腰痛になったかを。」

「俺が投げ飛ばしたから……だよな?」

「受話器に手をかけたフェイスマンだったが、いくらか躊躇った後、彼はエヴェレット氏の寝室に顔を覗かせた。」

「あー、エヴェレットさん?」

「何だ、早く救急車を。」

「僕のせいで腰を痛めたって、言わないでくれます? 滑って転んで腰を打ったとか何とか?」

「もうキムには話したが。」

「キムには内緒で救急車呼びますんで。」

「わかった、自分で転んだことにする。だから、早く救急車を呼んでくれ。」

「絶対に、秘密ね。」

「わかったから、早く。」

「そうしてフェイスマンは、電話の前に戻り、救急車を呼んだ。サイレンを鳴らさずに静かに来るように、注文をつけて。」

「それから二十分後、エヴェレット宅に置いたままだった自分の服も回収したフェイスマンは、救急隊員を迎え入れ、単なる第一発見者として事態を報告し、担架で運ばれていくエヴェレット氏に手を振った。」

「黒いセタンを撒こうと決めたウォルフとスタンディングだったが、七人乗り自転車では、急なカーブは曲がれないし(つまり、ほぼ直進のみ)、ギアチェンジはできないし(そもそもギアは一つだけ)、もちろんUターンなんでもっての外。それに加えて、相手はエンジン駆動。勝てるわけがない。」

「もう、どこをどう走っているのかわからない二人、息も絶え絶えに極力全速力でペダルを踏み込む。」

「あー畜生、ピョピョうるせえよ!」

スタングが怒鳴った。  
「怒鳴る余裕があんなら、俺の分も漕げ！」  
ヴォルフが怒鳴り返した。

「あの一。」  
そんな二人の横についた黒のセダンの窓が開き、運転している男が話しかけてきた。

「失礼ですけど、その自転車、どうなさったんですか？」  
二人よりもだいな年上、四十代半ばかそれ以上と思われる、スーツ姿の落ち着いた男は、優しく柔らかな声で問いかけてきた。

「何だ、てめエ。ポリ公じゃねえな？」

見かけで判断するスタング。

「ええ、警察の者ではありません。あの、こうやって話すのも危ないので、車を停めて、ちょっとお話を伺わせていただいでよろしいでしょうか？」

「ああ、もう何だかっていい！ 休もうぜ、スタング。」

ヘトヘトに輪をかけたヴォルフが、前を向いたまま叫んだ。

「おう。」

というわけで、変な自転車を漕ぐ足を止め、二人が自転車歩道を持ち上げると、黒のセダンは少し先の路肩に停まった。車から降りる、その男。細身で、すらりと背が高い。白髪混じりの金髪にネオンサインが反射してキラキラと輝いている。スタングとヴォルフは自転車を押して、男の前まで来た。

「突然のことで、さぞかし驚いておいででしょう。」

飽くまでもこやかに、男が言う。

「いや、別に驚いちゃいねえが、てっきりサツかと思っただんでよ。」

飽くまでもぐつたりと、ヴォルフが答える。

「で、おっさん、俺たちに何の用だ？」

ストコドッコイからの命令を多少は覚えていたスタングが要点を突く。

「あなた方に用と云いますか、その自転車に用が……。」

「このガラクタに？」

スタングとヴォルフが声を揃えた。

「盗んだんじゃないぞ。ちょっと借りただけだ（以下略）。」

「道路交通法違反してねえと思うぜ、こんなんでも（以下略）。」

□々にずらずらと弁明を始める。それは止まるところを知らないかのような勢いだった。

「ちょっと待って下さい、私はその自転車やあなた方を咎める気は全くありません。むしろ、その自転車を譲ってほしいと思ひまして……。」

二人はその言葉にビタリと弁明をやめ、疑わしげな眼差しを男に向けた。

「ああ、自己紹介もなしにこんなことをお話しして、さぞかし怪しい者だと思ひでしょう。私、こういう者です。」

男はジャケットの内ポケットからネームカードを出し、二人の前に差し出した。

「ヘンリック・ヤンソン……カリフォルニア州立大学の教授様かよ。」

ヴォルフがネームカードを受け取って読む。

「妙ちきりんな自転車専門かい？」

スタングが笑って言う。笑う体力は残っているようだ。

「専門は北欧文学です。特に祖国スウェーデンの。変わった自転車は……趣味です。」

「そりゃまた妙ちきりんな趣味だな。」

再度笑うスタングの脇腹を、ヴォルフが肘で小突いた。

「なあ、スタング。この住所って、あそこだよな？」

「あそこってどこだよ？」

スタングがネームカードを覗き込む。そこに書いてある住所、それは例のマンシジョンのものだった。

そう、この男こそ、ヤンソン・ブラザースの父親なのであった！ が、ロシアン・マフィアの二人は、そこまで知らない。

ネームカードを見つめてゴソゴソと話している二人を見て、ヤンソン氏は不安になった。

「あの、うちには子供が九人います、ちょうど自転車が欲しいと言っていたのを聞きましたもんで、その自転車をクリスマス・プレゼントにしようかと思ひましてね。これなら七人分のプレゼントになりますから。どうでしょう、その自転車を五十ドル、いえ、百ドルで譲っていただけませんか？」

「百ドル？」

スタングがニヤリとした。

「現金で即金なら、お譲りしましょう。」

こちらもニヤリとして、ヴォルフが言った。

「ありがとうございます！」

商談成立。早速、ヤンソン氏は財布から百ドルを出すと、ヴォルフに渡した。スタングは、ヴォルフが現金を受け取ったと見るや、自転車をセダンのルーフにドスツと上げ、ヤンソン氏が車のトランクから出してきたロープを使って、自転車をルーフに括りつけた。

「このご恩は決して忘れません。本当にどうもありがとうございます。ありがとうございました。」

そう言って、ヤンソン氏はセダンに乗って帰っていった。例のマンシジョンに。七人の子供たちの笑顔を思い浮かべながら。あと二人へのプレゼントをどうしようか考えながら。

スタングとヴォルフは歩道に立って、去っていくセダンを見送っていた。七人の子供たちの愕然とした表情を思い浮かべながら。

「さて、ロシア料理屋を探しに行くとするか。」

セダンが見えなくなると、ヴォルフがスタングに向き直って、結構元氣よく言った。

「でもよ、足がなくなっちゃったんだぜ。どうするよう？」

口を尖らせるスタングに、ヴォルフは百ドル札をピラピラと振った。

「これで俺たち、タクシーに乗れるだろ？」

スタングは嬉しげに大きく頷いて、一步車道に出ると、今まさにやって来たタクシーに向かって手を挙げた。二人の前に滑り込んで来たタクシーの中に乗り込むスタングとヴォルフ。

「こつから一番近いロシア料理屋まで頼む。」

「OK。」

フリーオでもなくハンニバルでもない、ごく普通のタクシー運転手は、ごく普通に二人をロシア料理屋の前まで運んでいった。しかし、彼が二人に請求したのは、ごく普通とは思えない深夜料金であった。